

関西大学独逸文学会研究発表概要

(第 112 回研究発表会)

1. ドイツ語における句読点の歴史

永沼 琴子

本発表では、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語までの様々なテキストを用いて、句読点の歴史を概観した。まず初めにドイツ語の文献ではないが、分かち書きがなされていない例として、銀文字聖書と呼ばれるゴート語聖書（*Silberbibeln*、原本：4 世紀、写本：6 世紀）を引き合いに出した。テキストでは語が連続して書かれており、どこで切るかは一目ではわからない。また所々語の右側に点が打たれており、何らかの区切りを示していると思われる。

余白を用いた分かち書きの習慣が生まれたのは、西暦 500 年頃である。書き言葉は当初、説教や朗読のために使われていた。朗読するのであれば、声によって意味の切れ目を浮かび上がらせることができるが、黙読になると目で語を識別しなければならなくなる。このような経緯で分かち書きがなされるようになったのである。ドイツ語文献は 750 年頃から歴史に登場してくるため、最初から分かち書きの文化があったことになる。

古高ドイツ語（750-1050 年）の資料として、オトフリートの福音書（*Otfrids Evangelienbuch*、9 世紀）とメルゼブルクの呪文（*Merseburger Zaubersprüche*、原本：8 世紀、写本：10 世紀）を挙げた。両者とも分かち書きされている。また前者のテキストでは、文中の区切りには中黒、文末には語の右上に点が打たれている。一方後者で確認できるのは中黒だけである。

次に取り上げたのは、中高ドイツ語（1050-1350 年）で書かれたニーベルンゲンの歌（*Das Nibelungenlied*、13 世紀）である。これは 1 節 4

行の韻文であるが、実際の写本では散文のように改行せずに書かれている。句読点に関しては中黒と、主に韻の箇所を目印に語の右下に点が打たれている。同時期の資料として、低地ドイツ語で書かれたザクセンシュピーゲル（Sachsenspiegel, 1225 年）も提示した。こちらは中黒が確認できた。

次に紹介したのは、マネッセ写本（Codex Manesse、14 世紀、図 1）である。その中でも、詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ（Walther von der Vogelweide, 1170-1230）のミンネザングを使用した。そのミンネザングは図 1 の左下の I から始まっている。韻文だが、ニーバーゲンの歌と同様に散文風に書かれている。以下は脚韻がわかるように、書き直したものである。

Ich saz ûf eime steine,
dô dahte ich bein mit beine,
dar ûf sazte ich mîn ellenbogen,
ich hete in mîne hand gesmogen
daz kinne und ein mîn wange.

私は岩の上に座り、
脚を組み、
その上に肘をつき、
手の中に顎と頬をうずめて
そこで黙って深く考えた。

マネッセ写本も句読点にはもっぱら中黒が用いられている。

ドイツ語文獻ではないが、初めての印刷本ということでゲーテンベルク 42 行聖書（42-zeilige Bibel, 15 世紀）も取り上げた。テキストはヴルガータと呼ばれるラテン語聖書である。ドイツ語とは異なり、もうすでにピリオドが見られ、他にも中黒、コロンのクエスチョンマークが見られる。

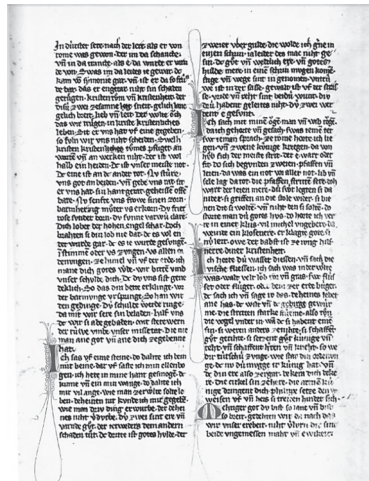


図 1、マネッセ写本、14 世紀

次に初期新高ドイツ語（1350-1650年）のテキストの紹介に入った。まずはドイツ語で書かれた印刷本としてかなり初期のものとと言えるエーデルシュタイン（Der Edelstein、1462年、図2）である。これも韻文だが散文のように書かれており、読んでいくと韻を踏んでいることがわかる。ゲーテンベルク42行聖書とは違いピリオドはまだなく、中黒が使われている。



Don-Grünheir.
 geschelche nye verdros. An ein wasser rug in sein
 weg. Do vant er wuß pruch nach fleg. Do was an
 ch schit nach man. Zu fülle wuße er ubir gau. Do
 er uere ham in den puch. De schatzen uo de fluch
 er do sach. Das er in sein müde rug. De sprach ich hie
 er wol genug. Alldir ich das buch zu dirken han.
 Ich schreie dan nach gewissen begad. Ich wolt es re
 nach begreifen. Do wuße ich das vnder fluch er
 wuße. Das er in sein müde sach. Do fluch er in ge
 oß ungemach. Das er sich buch hat verlor. Durch
 grüner das was im son. Der schatzen uo dem buch
 in betrog hat. Das geschicht noch an müde hat.
 Das wil dich ein kräuter wan. Derrege schau wie
 man. Der war ich durch unschere. Das im di
 ch wirt. Ich wirt ich das sein nicht ist. Alldir ich
 das im das geschicht. Grünheir wirt nimer gut.
 Sie betrug müde unschere mut. Das sein ist.

図2、Der Edelstein、1462年

活版印刷技術の恩恵を受けて、広く影響力を発揮したのは、宗教改革者マルティン・ルター（Martin Luther, 1483-1546）によるルター聖書（Lutherbibel）である。使用したテキストは1545年版のマルコによる福音書の冒頭である。新しい句読点として、斜線のヴィルゲル（/）が登場する。そしてドイツ語文献にも、文末を表すピリオドが姿を現してくる。他方これまで見られた中黒は姿形もなく、果たしてヴィルゲルが中黒に取って代わったものなのかについては、今後分析する必要がある。

最後に民衆本（Volksbücher）と呼ばれるテキストを二つ取り上げた。オイレンシュピーゲル（Eulenspiegel, 15世紀）と、ファウスト博士の物語（Historia von D. Johann Fausten, 16世紀）である。どちらもルター聖書と同じく、ヴィルゲルとピリオドが用いられている。

以上、句読点に着目しながら、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語までのテキストを中心に見てきた。ドイツ語の文献では、切れ目なく語を連ねるという原始的な方法とはらず、最初から分かち書きの文化があったことが確認できた。句読点に関しては、9世紀のオトフリートの福音書から15世紀のDer Edelsteinまで、中黒が主な句読点であった。16世紀に入ってようやく、新しい句読点としてヴィルゲルと、文末を表すピリオドが登場したと言えるだろう。ヴィルゲルに代わってコンマが普及

し始めるのは17世紀の終わり頃である。

2. ルターとピスカートアにおける 隠喩 (Metapher) と聖餐の理解について

福瀧 量子

この発表では、ピスカートアとルターにおける隠喩 (Metapher) の捉え方について、テキストに即して考察していく。ピスカートア (Johann Piscator) は、1602年から1604年にかけて、宗教改革以降の最初の完全な全訳聖書を、改革派の土壌のもとで出版したことで知られている。ピスカートアの隠喩理解は、アリストテレスの伝統的な隠喩理解を踏襲したものであった。彼によれば隠喩はトロポスの一種であるという。ここでのトロポスとは或る言葉の本来の意味が別の意味に置き換えられるものであると彼は言っている。それに対してルターは、隠喩は新しい意味を与えるもので、ただの置き換えではないという、当時では斬新な捉え方をしていた。またピスカートアが隠喩における *ist* (～である) を *Zeichen* (しるし、記号) と捉えているのに対し、ルターは *ist* は *Zeichen* ではないと考えている。そのため、聖餐の言葉の隠喩における *das ist mein leib* について、ルターと改革派では理解が異なる。この相違によって、聖餐理解は共在説と象徴説という二つの説に分かれる。

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]